

『愛しの彼は編集者様』

著：若月京子

ill：明神 翼

「……さて、それじゃ詳しく話を聞こうか。だいたいのところは把握しているけど、そもそもどうして車に乗ったのかな？ まさか、言うことを聞けば仕事をやるなんていう甘言に乗せられたわけじゃないだろう？」

「それは、違いますけど……」

「それじゃ、どうして？ トラちゃんの性格からして、乗った理由がよく分からない。野辺さんの下心には気がついていたのに」

「野辺さんがしつこいから通行人にジロジロ見られていたし…野辺さん、構文社に報告するって……」

「うちの会社に？ 何を？」

「……中丸さんが、無礼だって。失礼な態度を取られたって、苦情を申し立てるって言われたんです」

「なるほど…そう脅(おど)されて、車に乗ったのか」

「はい……」

「そんな脅(おど)しに怯(おび)える必要はなかったのに。MITAの広報部長からの苦情となればそれなりに面倒だけど、ボクも仕事ではそれなりに信頼を得ているからね。それくらいで処分されたりはしないよ」

「そう…なんですか？」

「もちろん事情を聞かれたりはするだろうけど、本当のことを言えば納得してくれるんじゃないかな。この手の悪評は表立って流れることはないけど、裏ではわりと知られていたりするから。会社の契約したホテルで浮気をするような間抜けなら、尚更だよ」

「はあ……」

それならやはり車に乗る必要はなかったのかと、猛虎は落ち込む。

あの場を離れて冷静になってみれば、野辺についていっても自力ではとても説得などできなかつたと分かる。

身を危険に晒し、事を大(おお)袈(げ)袈(さ)にして中丸の仕事の邪魔をただけだ。

目の色を変え、ものすごい形相で迫ってきた野辺を思い出し、猛虎はブルリと震える。

ついでに野辺に言われたひどいこと、それを電話越しに中丸にも聞かれたことを思い出した。

「あ、あのっ。野辺さんが言ったことは、でたらめですから！ 中丸さんに抱かれたんだろうとか、そういうこと、ボクは一言も言ってません。あの人が勝手に思い込んだだけで——……」

猛虎は中丸に向かって必死に言い訳をする。

中丸に誤解をされたくない一心だったのだが、中丸は笑いながら猛虎を宥(なだ)めた。

隣に座り、ポンポンと優しく背中を叩かれる。

「大丈夫、落ち着いて。分かっているから」

「……………」

「あれは、野辺さんの勝手な思い込みだ。キミがボクに抱かれているから仕事を回してもらっていたとでも言ったんだろう？」

「そ、そうです。違うって言ったのに、全然聞いてくれなくて……………」

「自分がそういうことをする人だから、他の人もそうすると思ひ込むんだよ。実に卑しい考え方だけど、残念ながらそういう考えの人はいるからね。人を見る目も、絵を見る目もないんだな。トラちゃんの可愛い顔だけを見て、勝手に妄想を膨らませたんだろね」

「だから、顔を隠してたのに……………」

この顔は、いいことよりも悪いことを呼ぶほうが多い。さすがに野辺のように極端すぎる行動を取る人間はいなかったが、似たような言葉をぶつけられた経験は今までに何度もあったのである。

思わずまたズシンと暗くなる猛虎に、中丸が困ったような声で言う。

「…………でも、野辺さんの思い込みは別にして、ボクはトラちゃんを抱きたいと思ってる。そういう意味で、トラちゃんのことを好きなんだ。ただ単に、顔が可愛いからじゃないよ？ トラちゃんの何もかもがとても可愛くて、愛おしい……………」

「えっ……………」

突然の言葉に猛虎は目を見開き、驚きの声を上げる。

「ず、好き…………？」

「そうだよ。ボクは、トラちゃんが好きなんだ。こんなときに言うのもどうかと思うけど、変なふうに思い込まれたままなのも困るし。野辺はトラちゃんの顔だけを見て迫ったかもしれないけど、ボクは違う。行動や考え方、ちょっと不器用なところも全部好きになったんだよ。トラちゃんは？ ボクのこと、嫌い？」

その問いに猛虎は慌ててブルブルと首を横に振る。

「それじゃ、好き？」

今度はうんうんと頷いたものの、困惑は大きい。自分の好きが、中丸と同じ意味での好きかどうかは分からなかった。

引っ込み思案で周りとうまく馴染めずにきた猛虎にとって、中丸は心の内側まで入り込んできた唯一の人だ。

中丸が七生などの優しい人たちに繋げてくれて、イラストの仕事もくれた。

今、猛虎の生活は幸せで充実したものになっている。そのすべては中丸のおかげであり、中丸はとても大切な人で、とても好きだった。

だから好きかという質問には素直に頷けたが、もしその質問が抱かれてもいいかというものだったら頷けなかったに違いない。

人と触れ合うこと自体が苦手なのに、男同士なんて未知の世界だ。

困惑と不安を滲ませる猛虎に、中丸は笑いながら言う。

「今は、好きだって言ってくれるだけで嬉しいよ。しばらく一緒にいられることだし、のんびり口説かせてもらうから」

でもこれくらいは大丈夫かな…と呟き、キスをする。

「——」

触れるだけの優しいキスだが、驚き固まる猛虎に聞く。

「気持ち悪かった？」

猛虎がプルプルと首を横に振ると、もう一度キス。

今度は先ほどよりも長いものだった。

「ボクとしては恋人としてお付き合いをさせてもらうつもりだから。こうして、少しずつ触れ合うことにも慣れていこうね」

ニッコリと微笑みながらも、有無を言わさぬ強い響きがある。

いかにも優しく譲歩してくれているようだが、実は中丸の望む方向に誘導されていた。

猛虎は展開の速さに目を白黒させ、混乱した気持ちのまま中丸の言葉にコクコクと頷く状態だった。

本文 p164～170 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>